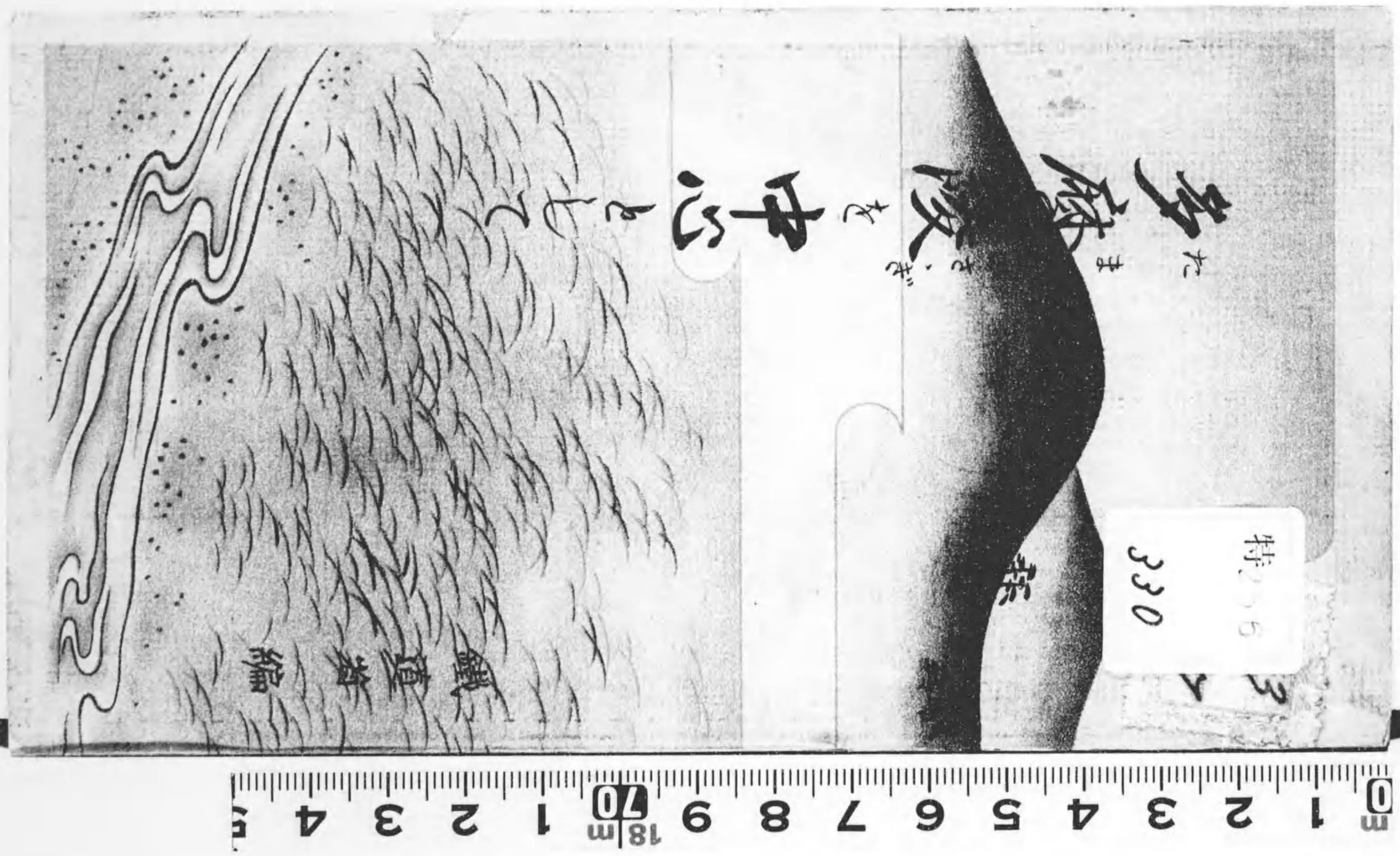


特 330

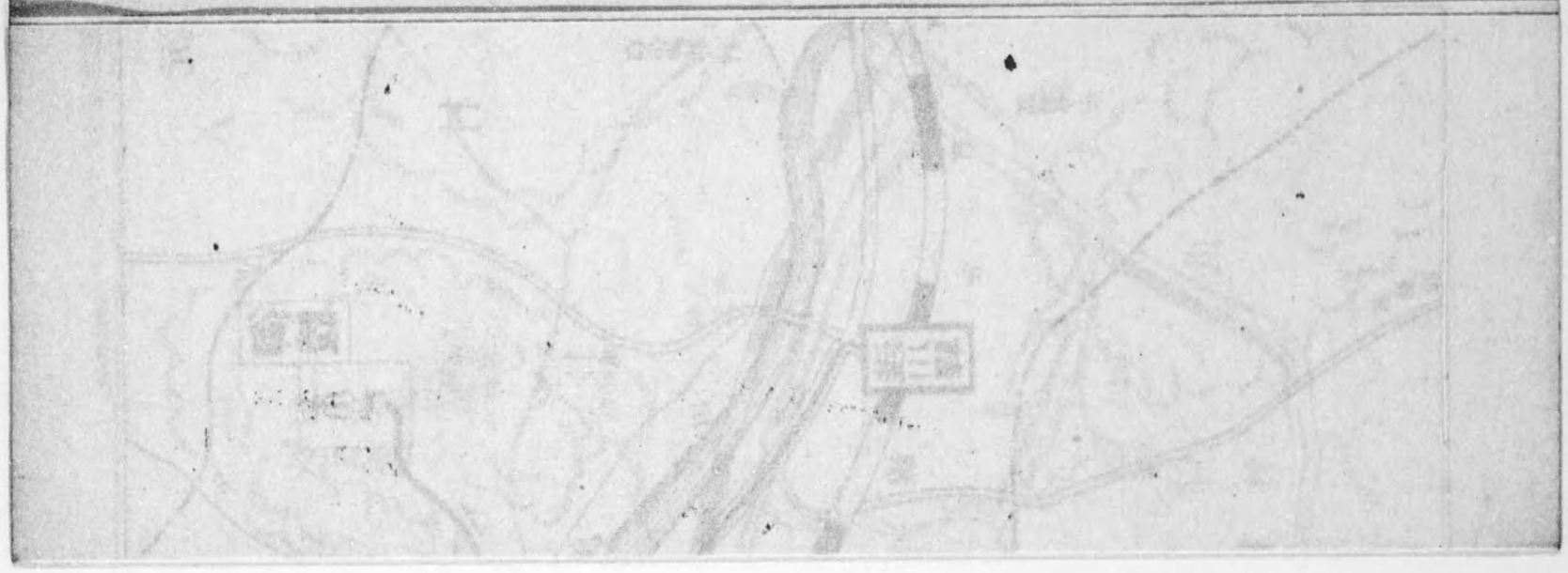
特 256
330

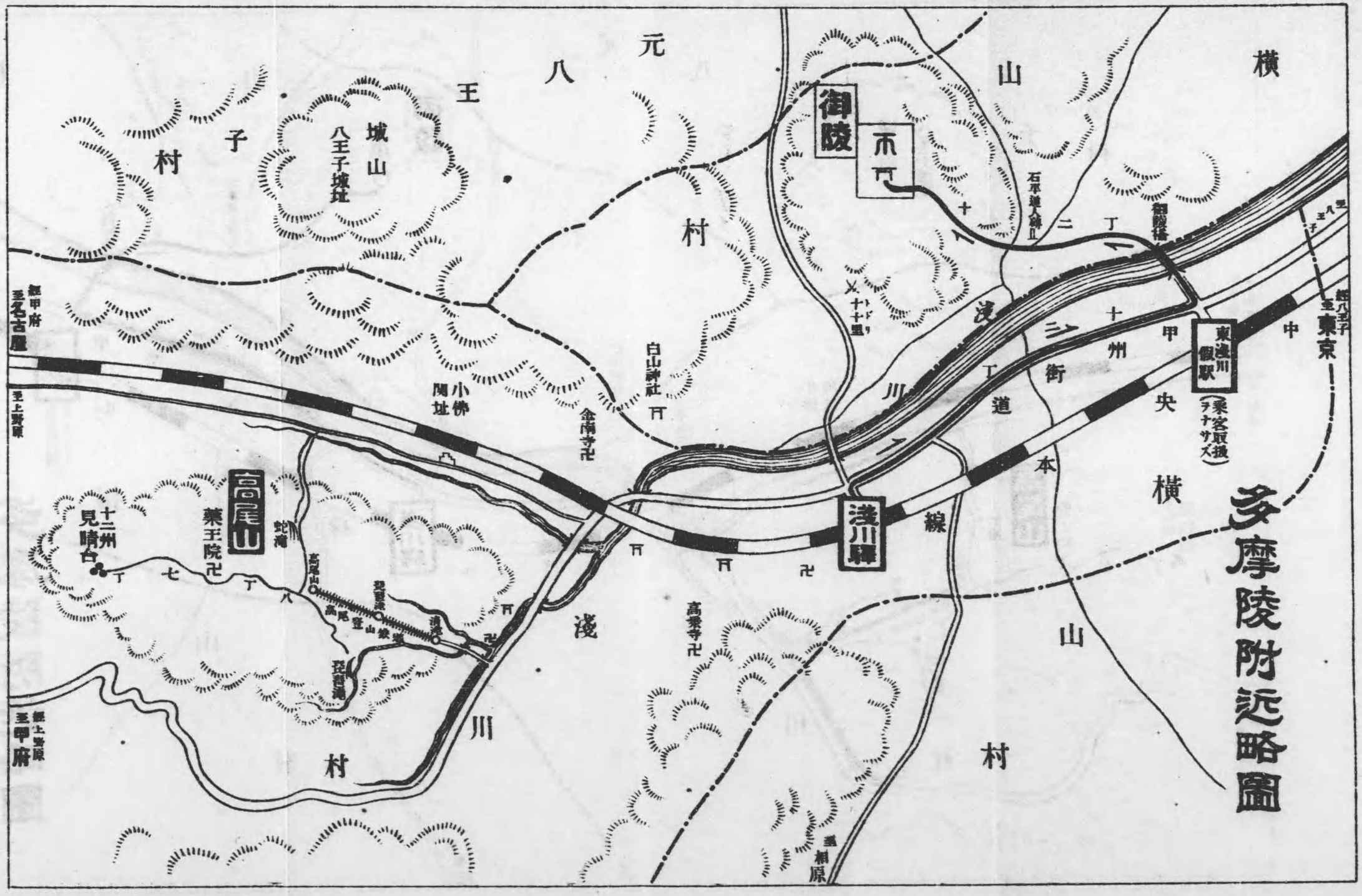
緒言

本冊子は多摩御陵を中心として附近の名勝史蹟を述べ、且中央本線吉祥寺驛から大月驛に至る沿線名勝地の大畧を記したものである。

御陵のある多摩の横山、八王子城址を彩る北條氏照の事蹟、高尾山の三つが本文の生命とするところである。従つて其附近に星散する多くの史蹟及神社佛閣の縁起傳説などは他日に讓り、こゝには單に其名稱のみを巻末に附記し參考に資することゝした。

昭和二年初春



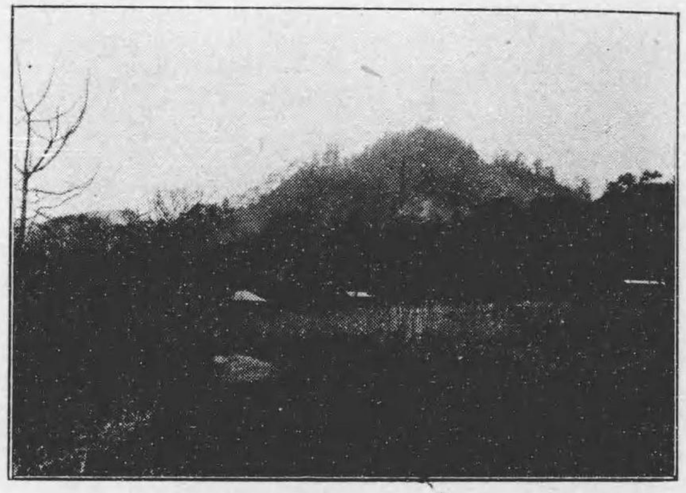

多摩陵附近略圖
東京
中央本線
東淺川假駅
(乘客取扱ヲナサズ)
淺川驛
御陵
御陵橋
石平連人神社
十二丁
十二州街道
甲州
横山村
横山村
淺川村
淺川
高乘寺
白山神社
金剛寺
小佛関址
八王子城山
八王子城址
八王子村
元八王子村
高尾山
薬王院
蛇滝
十二州見晴台
七丁
八丁
高尾山
高尾登山鉄道
清滝
琵琶滝
桐原
至八王子
至東京
至名古屋
至甲府
至上野原

大正天皇

多摩陵

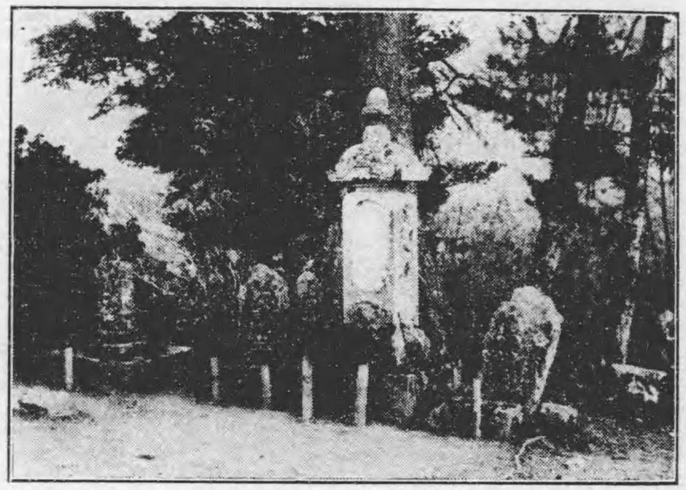
大正拾五年拾貳月貳拾五日
午前壹時貳拾五分崩御
昭和貳年貳月八日斂葬

閑院宮殿下の御染筆



▼八王子城址▲　淺川驛の西北約一里

天正十八年豐臣勢は、前田利家、上杉景勝を主將として、鋭兵一萬五千を以て八王子城を攻めた。北條方は、城兵僅に二千、衆寡遂に敵せず、城は火焔に包まれて六月二十三日の夕刻陥落した。星霜こゝに三百三十余年、今尚、本丸、物見櫓跡などを殘してありし昔の苦戰を偲ばせる。



▼北條氏照の墓▲

淺川驛より約一里八王子城址の麓にあり

八王子城主北條氏照は氏康の二男、若冠より大敵に當り、機略妙に入る勇將であつた。天正十八年七月兄氏政を援けん爲、小田原城に赴き豐臣勢の爲に破られ小田原で自刄した、時に年四十九。

元祿二年氏照の百年忌に際し遺臣こゝに墓を建てゝ供養したのである。

▼小佛關址▲

淺川驛より甲州街道を西へ約十五町

淺川村駒木野にある。

小佛峠に近く昔は碓氷、箱根と共に重要視されて居た關所である。街道に沿うて古びた石垣と一株の老松が見える。今之を「お關所の松」と稱へこゝが關址である。

附近に散在する民家の樣にもいくらか當時の俤が殘つて居る。

目次

一、概說……一
一、多摩御陵……三
一、武藏野と多摩の横山……六
一、十々里古戰場……八
一、八王子城阯……九
一、北條氏照……一〇
一、高尾山……一二
一、小佛峠……一五
一、小佛關址……一八
一、八王子市……一九

一、千人隊の遺跡……一〇
一、恩方村方面……一一
一、附　記……一三
一、沿線の名勝地……一三
井の頭公園
小金井の櫻
大國魂神社
武藏御嶽
奥多摩の勝
相模川の舟遊
猿　橋
富士登山と裾野巡り

概　說

南多摩の横山村、あるひは淺川村、または元八王子村など、今迄名もなき僻陬の地が、俄に天下の名所となり、廣く世の注目をひく事になつたのは、言ふ迄もなく、昭和二年一月三日宮內省告示により東京府下南多摩郡横山村、淺川村及元八王子村所在の御料地內が武藏陵墓地に、又横山村大字下長房字龍ケ谷戸が大正天皇の御陵に御指定になつたからである。

○

然しよく考へて見ると、よく研究して見ると、此の地附近一帶は元龜天正の戰國時代、甲斐の武田、越後の上杉、小田原の北條氏など、天下の驍將が互に武略をめぐらし、幾度か此の附近に干戈を交へて雌雄を爭うた所で、一面に於て武藏野の戰史の小縮圖を成すと共に、他の一面に於て日本の文明史に大きな關係をもつ由緒深い土地である。それが、今まで一般に忘れられて久しく世に埋もれて居たのである。

○

武藏と甲斐の國境、小佛峠は甲州街道に於ける交通の要路で、當時の小佛關は箱根、碓氷よりも重要視せられて居た關所である。

○

八王子市の南、由井村は千百年前清和天皇の時代既に牧場の盛んな土地で、又横山地方も萬葉のいはゆる赤駒を放飼したといふところ。横山の男兒(をのこ)たちが馬上豐かに武藏野を馳驅した往時の樣が猶ほ眼前に髣髴するの感がある。

○

八王子城は北條氏照の居城、氏照は武人として、文人として、又私人として、其の生涯は後世の範艦として、學ぶべき事が多々ある。之が史實のみにても、一卷の繪卷物を見るよりも、華かであり、又豐かである。

○

更に、關東最初の御陵を此の地に御選定あらせられ、昭和二年二月八日を以て、大正天皇の英靈、永へに神鎭りまし給ひしは、畏くも亦悲しき事ではあるが、萬民は之を以て子々孫々に至るまで、此處を歷代の御陵所として、皇室の御威德を仰ぎ奉る地なることを忘れてはならない。

多摩御陵

東京府南多摩郡横山村
大字下長房字龍ヶ谷戸

淺川驛に下車。線路に沿ひ甲州街道を東へ約十丁戻ると、東淺川假驛がある。それより北へ向けて約十丁幅員七間の土の香も新しい新道が御陵への參道である。甲州街道と參道の十字路から約二丁に、淺川に架せられた白木造りの神々しい御陵橋=南淺川橋がある。こゝから約四丁にして大鳥居に出る。即ち御陵地域である。參道口まで自動車の便がある。賃金二十錢。鳥居をくぐつて御陵に近づけば、最初右手の丘に見えるのは衞兵所、左は大喪儀に於ける參列員休憩所、大喪使詰所等がある。愈門に近づけば御陵の守衞詰所、祭官詰所があり、次いで靑竹すが〳〵しい垣

を左右に見て御門を入る。そこの廣場が一般の參拜所である。

別途八王子驛から行けば、この逆で甲州街道を西へ約二里で、矢張この參道に會することゝなる。參道口迄自動車賃三十錢。

從來御陵は京都及其附近に限られてゐたことは、桃山御陵を始め、歷代の御陵を見ても拜察されるのであるが、今回は新陵墓令によつて、東都附近に定められたことは、關東の人々にとりては誠に喜ぶべきことである。更に帝都から約一時間半で參拜の榮に浴し得るゝことは、恰度京阪人士の桃山御陵に於けると同樣である。

御陵墓地は約七百坪、御瑩壙は三間四方、更に周圍十間四方に三尺の溝あり、下部はコンクリート上部は石垣であるが、やがては上圓下方の桃山御陵に見るが如きものとなるのであらう。地は一帶の丘陵、海拔七百二十尺、右は老松古杉森々とし、左は武藏野ヶ原展け、丘と野とは、さながら太洋のうねりを思はせ、丘後は長房山の峯巒近く、これを隔てゝ遠く、秩父山彙の翠黛が美しう指摘さるゝ清淨比類なき境地である。しかも其の西南に當つては、紅葉で知らるゝ高尾山が控へ一段

の風致を添へてゐる。

英靈一度此地に神鎭まり給ふや、必ず遠近からの參拜者が踵を接することであらう。回顧すれば明治天皇御大喪後、桃山御陵を一般の爲めに參拜を差許されたのは九月十八日から十月十五日迄、更に、十一月三日迄延期されて此の四十六日間に於ける參拜者は、實に四百萬人卽ち一日平均八萬七千と云ふ多數に上つた事實からでも、容易に之を推すことが出來る。

この丘陵地は、横山村と云ひ、古來「多摩の横山」とて武藏野の一風光美を形成してゐる地である。龍ヶ谷戸と云ふ名稱の起原は其の昔此邊は大なる湖で、巨龍生棲し、其の龍が機を得て昇天して、其後に豐饒なる土地が殘つたと云ふ傳說から附されたと云はれてゐる。又螢の名所として龍臥の別名もある。

更に附近は北條氏照を背景とした歷史上有名な古戰場である。中世坂東武者の勇名に殘る武藏七黨の中、横山黨の名稱もあるが、何んと云つても此處では北條氏照の波瀾の多い一生の繪卷を繙かねばならない。

武藏野と多摩の横山

草枕

あまた旅寢を
數へても
未だ武藏野の
末ぞ殘れる

其の廣漠蕭條たる景は、此の一首によく髣髴されてゐるが、逃水の傳說などはよく其眞を穿つてゐて、山水の勝に劣らぬ平野の妙味ではあるまいか。逃水とは、水が流れてゐるやうに見えるので傍へ近よると、何もない、如何に旅人に儚ない思ひをさせた事であらう。これは草から立つ陽炎の類と解釋されてゐるので、武藏野の傳說として面白いものである。この廣漠たる野原では幾度が劍戟閃き戰塵が舞上つた。古墳や塚の多いのも其の特色の一である。

この武藏野の中を縫つて流れる多摩川は、玉川上水の母體であり、帝都二百萬の市民を霑してゐるが、其美しい背景をなすものは、この横山の姿である。丘姿から推して「眉引(まよひき)の横山(よこやま)」の雅稱もある。

赤駒を
山野にはなし
とりかねて
多麻の餘許夜麻(よこやま)
かちゆかやらむ

萬葉の古歌である多摩の餘許夜麻は、今の多摩の横山で、この歌は此邊の叙景歌と解釋されゐる。歌の大意は、夫が遠國へ旅立つのを送つた哀歌である、卽ち其の旅立に際し、あいにくにも手飼の馬を武藏野に放つておいて、すぐに見付からぬ、はてさて困つたものではある、まゝよ主人に横山を徒步で行つて貰ふことにしようと云ふ妻の心持を現はしたものである。

それで古代は此邊は牧場であつたことが想はれ又物の本にも書かれ、其れに緣ある地名も諸所に散點してゐるのである。

實にこの横山は小佛峠から數里、多摩川の緣に沿うて相模野と武藏野の境界線ともなつてゐて、下流二子の渡の邊で消えてゐる。柔い綠の美しさは獨特の味を有してゐる。

十々里古戰場

御陵地附近は十十里と稱し永祿年間＝約三百六十年前武田信玄の臣、小山田信茂と北條氏照の臣、横地監物、近藤出羽介と干戈相搏つた古戰場である。今の帝室林業試驗場を中心にして東西約十一丁、南北約七丁余に亘る地域が卽ちこれである。

時は永祿十二年十月、武田信玄は相州小田原にある氏照の父氏康を攻めんとし、其の先陣の血祭りに氏照の本城たる瀧山城＝八王子驛から北一里十五丁を陷さんとした前衞戰が此の十々里原の合戰である。北條勢は應戰之に努めたが、戰利あらず、十々里砦は脆くも破れ終に其の本城たる瀧山

城も武田勢に包圍され四面楚歌の巷となつた。

信玄は更に軍を小田原へ進め、其歸途、氏照は相州三增山下に復讐の軍を扼して戰つたが再び大敗、九死一生僅かに身を以て免れた。武田勢は揚々凱歌を奏して甲州へ引揚げたのである。

氏照は後に甲州に備へんが爲め瀧山城から八王子城へ移つた、一說には「瀧は落つる」の忌み言葉を嫌つたためだとも傳へられて居る

八王子城址

淺川驛の西北約一里、元八王子村大字元八王子と恩方村との境にあつて今城山とよんでゐる。

當時、城は東西十三丁十間、南北六丁四十七間、周圍三十五丁十四間、山麓四方に聳え東に城山川流れ西に小佛の險を扼した要害の地である。

今、本丸、小宮曲輪、松本曲輪などに石垣を存し、尙、氏照館阯、千疊敷阯、古井戸、物見櫓阯、などが殘つて當時を物語つて居る。今も此附近から時々焦げた米などが發掘される。

此城も亦瀧山城と同様な落城の悲運に遇つたものである、時は天正十八年六月、豐臣秀吉は上杉景勝、前田利家の二將に一萬五千の兵を與へ之を攻略せしめたのである。時に氏照は其の兄氏政を援けむとして小田原にあつた。守將中山家範、横地監物、狩野一庵等は殘兵數千を指揮して好く戰ひ、好く拒いだが衆寡敵せず遂に刀折れ矢竭きて討死し、城又火焔に包まれて陷落した。之れ實に六月二十三日の未明より夕刻までの事である。爾來星霜三百三十七年、山河今尙恨を止め、山上の松籟英魂を吊ふの感がある。

氏照は於是同年七月十一日兄相模守氏政と共に小田原に自刄した。花も實もある彼の一生は可惜四十有九歳を以て其の幕を閉ぢたのである。

北條氏照

氏照は關東を風靡する概あつた北條氏康の二男である。天資勇邁にして、若冠より大敵に當り、たとへ敗を招くとも其機略妙に入るの素質があつた。例へば永祿三年、二十才前後の時、大幡附近

で上杉勢を破り、又同十二年相州三增山下にて武田勢の小田原からの歸途を扼して、捲土重來復讐せんとし反つて敗れたのであるが、彼は當時僅かに二十九才、信玄は四十九才。機略神の如き信玄には一籌を輸さねばならなかつたが、彼れ老巧の信玄を敵手として好く戰ひ之を惱ましたことは、氏照が年少にして如何に武勇に長じて居たことを明かに物語つて居る。

氏照はかくて又勇武一律の人ではなかつた。城中常に名僧を招いて禪門に入り、謠曲を好み、笛の名手として名笛「大黑」は彼れが祕藏のもので、又菊と梅花とは彼の最も愛好する花であつた。全く戰塵の間にあつて悠々閑日月の概があつたのである。又部下を愛する念深く、八王子城が上杉勢の大軍に攻められたとき、氏照は城に居なかつたが殘兵よく孤軍奮鬪主なくして、よく支へ牢乎として拔く能はざらしめたことも、この間の消息を語るものである。

彼が小田原で自刄したとき、其の愛童小角定吉と云ふ者年齒十六才で主の首を盜んで此處へ逃れた美談なども主從の床しい鑑であらう。

氏照の墓は今城址に近く、宗關寺のほとり一丘陵の上にある。元祿二年氏照の百年忌に遺臣鐵山

無心なるものが因み深き此地に墓石を立て供養したのである。

墓石の高サ七尺七寸、表に法名「青霽院殿透岳宗關大居士」天正十八庚寅七月十一烏と刻し、裏に北條陸奥守氏照公、元祿二巳天七月十一日現住信庵叟海音造立之と讀まる。

氏照の墓に隣つて八王子城で奮戰討死した重臣中山家範、金子家重などの墓が並んでゐる。

又寺寶として氏照の首を包んだと傳ふる血染の袈裟を藏してゐる。

附近部落では年末に餅をつかず、正月二日に搗き、又六月二十三日に各家赤飯を炊く奇習がある。前者は北條氏の家例に倣つたもの、後者は八王子城落城の際、鮮血流れて川水染まり、地人水を汲んで飯を炊いたところ、赤色の飯が賁えたと云ふローマンティクな故事が其の因となつたのである。

高尾山

淺川驛から約半里、自動車賃二十五錢。八王子驛から二里三丁、自動車賃六十錢。山麓清瀧から登山鐵道の便があり、其の終點高尾山停留場は藥王院の手前八丁の處である。賃金片道二十五錢、往復四十五錢。十分間で達する。

山は關東で紅葉の名所として又靈山として知られて居る。麓から頂上まで約二十丁であるが、今は登山鐵道が通じて居るので、老人でも子供でもわけなく登ることが出來る。そして座ながらに山容水態の美に接することが出來る。

沿道には巨杉老松多く、全山殆ど密林をなし、今御料林となつてゐる。

山腹には琵琶瀧、蛇瀧の名勝があり、精神病に効があると云はれ、夏にはお籠りするものが多い。

頂上には飯縄權現堂、大日堂、護摩堂、大師堂、不動堂、鐘樓等の建物、或は高く或は低く老杉の間に配せられて立ち、靈氣自ら人に迫るの感がある。

寺は有喜寺と稱し、新義眞言宗で寺傳によれば天平十六年＝約千二百年前＝僧行基の草創で藥師如來を本尊としてゐる。

此處から約八丁に十二州見晴臺の勝地がある。

地は目に一木の遮るものなく、眺望には絶好の地で、相模、伊豆、駿河、甲斐、上野、下野など十二ヶ國が見えるので十二州見晴臺の贊稱がある。

山中には靈鳥佛法僧の鳴聲を聞くことがある。古代武藏野を詠じた歌によく「ムラサキ」と云ふ草も近時發見された。江戸名産紫染の染料となるといふのである。

武藏野に
生ふるとし聞けば
紫の
その色ならぬ
花もむつまし

（續古今集）

其他藥王院に詣でた序でに、御布施を納めて精進料理の味に舌を鳴らすも土産話となつて面白からう。中里介山氏の大菩薩峠を讀んだ人には、構圖の一部ともなつてゐるから一層此山は興味を湧かす種ともならう。

小佛峠

小佛峠は甲州街道中、笹子に次ぐ有名な難所である。上下二里、絶頂は道を挾んで、國を異にし、西南に富士が見えるので、往時は富士峠又は富士關と呼んで居た。

「雲雀より上にやすらう峠かな」と云ふ芭蕉の句碑が最近まで嶺上にあつたが、今は駒木野の三光莊内に移されて居る。

永祿十二年＝約三百六十年前武田信玄が小田原城を攻める際には、此處を通つたことが舊記に明かである。

明治元年三月には板垣退助が官軍を率ゐて此地を通過して江戸に入つた。

明治十三年六月十七日　明治天皇、山梨、三重御巡幸の際は此の峠を御通御あらせられたのである。

＝中里介山氏『大菩薩峠無明の巻』より＝

本坊の前から炊谷（むしたに）へかけて、森々たる老杉の中へ駕籠が進んで行く時分に、さき程から小止みになつてゐた雨空の一角が破れて、そこから、かすかな月の光りが洩れて出でました。

『占めた、お月様が出たよ』

老杉の間から投げられた光りを仰いで、行手を安心する駕籠舁の聲を、駕籠の中で龍之助は聞いて、

『あゝ、雨がやんだか』

『えゝ、雨がやんでお月様が出ましたよ、もう占めたものです』

『この分だと大見晴らしから小佛の五十丁峠で月見が出來ますぜ』

しかしながら、山駕籠は別段に改まつて急ぐといふわけでもなく、老杉の間の、この邊はもう全く勾配は無くなつてゐる杉の大樹の眞暗い中を、小田原提灯の光り一つを便りにして、ずん〳〵進んで行きます。

駕籠に搖られてゐる龍之助は、天に月あることを聞いたが、身は今、此の老大樹の闇の中を

進んでゐることを知らない。たゞ梢遙の上より降り落つる陰深な鳥の聲を聞いて、こゝは多分護られたる靈域の奥であらうとは想像するのです。

ふと、その空氣の壓迫と怪しい鳥の落ちて來る鳴き聲に、過ぎにし武州御嶽山の霧の御坂の夜の事が彼の念頭を鉛のやうに抑へて來ました。

◎

道はいつしか、老杉の境を出でて榛木科の密林をよぎると、そこからすゝき尾花の大見晴しの頭が現はれます。

『すつかり晴れちまつたね、いゝお月見ですよ、旦那様』

駕籠屋がいゝ心持ちで天を仰いで雨あがりの雲間の冴えた月をながめて、その氣分をいさかながら駕中の人に傳へやうとする好意で、

『こゝのお月見は格別ですね何しろ十二ケ國が一眼で見渡せるんですからね』

駕籠はすゝき尾花の大見晴らしを徐々と押しわけて進むと、五十丁峠のやゝ下りになります。

小佛關址

淺川驛より甲州街道を西へ約十五町、淺川村大字上長房字駒木野にある。駒木野橋を渡ると、右方の街道に沿うて古びた石垣と一株の老松が見える、之を「お關所の松」と稱へ、此處が關址である。小佛峠に近く、山三方に迫つて如何にも關所らしい地勢を示し、附近に散在する民家の樣にも、いくらか當時の俤を偲ばせてゐる。

往時は小佛峠の頂に砦を構へ、甲州の固めとして、此嶮所を扼したのであるが、氏照は八王子城の完成に伴ひ、天正八年此地に之を移し、行旅を便にするの措置に出たと傳へられて居る。後年之を「駒木野關」も稱へてゐるが、天和、元文、寛政、文政等の文書には總て「小佛關」と記されて居る。

關址の約半丁に關所役人の役宅址がある。其處には當時の關役人の子孫小野崎一家が住み、關所の關する古文書を多く藏してゐる。

八王子市

市は桐生、足利と共に關東の三機業地の一で高貴織、繻珍、縮緬など立派なものが出來る。「八王子の女は腰が平たい」と云ふ諺がある。それほどこの地の婦女子は少さい時から機抒のことにしたがつてゐるのである。今人口は四萬五千、府立染織學校などがある、横山町、八日町などが一番賑やかな場所である。

沿革は八王子城の陷落と因緣が深い。換言すれば城の滅亡は圖らずも八王子市開設の導火線とはなつたのである。前田利家は北條氏の遺臣、長田元重に命じて、復興を掌らしめたもので、元重は其當時の横山卽ち現今の八王子の所在地に、城下町であつた横山、八日市、八幡三宿の名を移して、市場を開き町家をつくつたのである、之が其の濫觴である。

市で見るべきものは鄰躅園、大善寺、極樂寺、信松院などであらう。大善寺は關東十八檀林の一北條氏照の群臣がことゞく檀家となつた名刹である、極樂寺には前述の長田元重や、桑都日記の

著者である鹽野適齋などの墓があり、信松院は武田新館尼の開基で老松の名木や秀吉が朝鮮征伐に用ひた軍艦模型や、尼の遺物が殘つてゐる。

信松院、八王子驛の西約十四町、臺町にあり、しづかな一寸感じのよい寺である。寺は曹洞宗で武田信玄の六女松姫の開基である。姫は武田氏沒落後、妹と姪を連れて遁れ、北條氏照の師事せし舜悅禪師の門に入り、圓頂黑衣の人となつた時に年齒漸く十八、人之を新館尼と呼んだ。

姫は始め織田信長の嫡子奇妙丸と婚約があつたが、之れが破談となつた後は、人勸むれども嫁せず、遂に佛門に入るに至つたので、爾來紡織に月日を送つた哀史がある。妹は後家康の侍女となつたのである。

千人隊の遺跡

八王子の千人隊とは文字どほり總員千人からなる江戸幕府御鑓奉行の配下の職名で、一に八王子千鎗隊又は千人同心或は千人組とも稱した。この職を置いたのは天正十八年北條氏沒落後、人心騷

擾を警戒する爲であるが又小佛に守備といふ軍事上の目的も大に含まれて居たのである。

恥を恥とせよ、名を重んぜよ、勇武であれ儉素であれ、之が千人隊の標語(モットー)であつた。その槍術も長槍水打の術と稱へ、突くのでなく打つ槍の稽古をして常に多摩川の水流に臨んで調練したと云ふことである。

徳川氏の代になつて人數も增加し事業はだん〴〵大きくなつた。

「火事と喧嘩は江戸の花」と言はれた如く、江戸には常に火事があつた。大火があれば千人隊は直に八王子から馳けつけて行つた。日光の勤番にもあたる、蝦夷地の開拓にもあたると云ふ風であつた。徳川政府の官選地誌、武藏風土記稿の編纂にも參加し、千人隊の功績は大きかつた。之の編纂に功あつた千人組の同心頭植田十兵衞といふ人は「武藏名所圖會」の著者として聞えてゐる。

恩方村方面

八王子驛より元八王子村を經て西へ二里、自動車賃六十錢。恩方村より村の西端案下峠まで三里

の大溪谷がある。此の附近一帶古代石器時代の遺物多く、今折々發掘される。淨福寺、大石氏遺趾、寶生寺、心源院、皎月院、刀匠下原鍛治の遺跡など見るべき處であらう。

附記

其他見るべき處を列記すれば、石平道人「江戸時代の小説家鈴木正三」の修行道場、堅叔庵の遺跡、横山黨一族の椚田(くぬぎだ)氏の據つた初澤城址、北條氏直、氏照の血脈、氏虎氏照の朱印を寺寶とする高乘寺、大光寺、眞福寺、高樂寺、淨泉寺、御靈明神、御靈ヶ谷、興福寺、眞覺寺、高宰明神、廣園寺、長泉寺、龍泉寺、後向八幡など曳杖地であらう。

沿線名勝地

井の頭公園

吉祥寺驛から五丁、井の頭の池を挾んだ幽邃鄕である。池は二萬坪、清冽氷の如く、中島には

辨財天、聖天の兩社がある。舊時は神前の水と云つたが、大猷院殿來遊し「此の池は江戸のほとりの井の頭」の上意があつたので此名となつた。近時水泳場の設備がある。

小金井の櫻

武藏小金井驛から約五丁、多摩川上水を挾んで櫻がつゞく。日の出櫻、入日の櫻、三吉野櫻、小町櫻の名木がある、花期四月中旬には新宿驛から臨時列車を運轉する。

大國魂神社

國分寺驛から南三十丁、自動車賃三十錢。或は京王電氣軌道線（東京市內新宿追分、東八王子間を本線とし、調布、多摩川原間を支線とする）によれば府中(ふちゅう)停留場前で下りると、約三十分。祭神武藏大國魂神、景行天皇の四十一年五月五日神託により創建、官幣小社となる。地は中古武藏の首府、境內源賴義が寄進と傳ふる欅樹の並木は一偉觀である。總數六十本天然記念物となつてゐる。祭日五月五日、社背分倍河原の古戰場がある、新田、鎌倉兩勢及兩上杉の古戰場である。

武藏御嶽

立川驛から分岐する青梅鐵道の終點二俱尾驛から山麓迄二里半、自動車の便がある。海拔約三千尺の頂上に府社御嶽神社あり、祭神、櫛眞智命、大己貴命、少彦名命。社前の眺望豁然として胸襟開く。谿を隔て、日本武尊を祀る奥の院がある。

山內には天狗巖、七代瀧、富士峯、日の出山等がある。

奥多摩の勝

前記二俱尾驛から多摩川に沿うて三里、氷川に至る三里の間美しい溪谷が展開する。途中棚澤迄自動車賃一圓五十錢。氷川へ十二丁手前の數馬の奇巖は名高いものである。

氷川から尙多摩川に沿うて三里のところ小河內鑛泉（一名鶴の湯鑛泉）がある。又別路氷川から多摩川に注ぐ日原川を三里遡ると日原の鐘乳洞がある。

相模川の舟遊

淺川驛の隣り與瀨驛から西南十丁を離れた勝瀨から乘船、舟程九里廿丁で厚木に至る、八時間

を要する。春は鄰蹟、夏は鮎漁、秋の紅葉の眺がよい。途中小倉から約一里、横濱線の橋本驛へ出られる。厚木からは相模鐵道によつて東海道線の茅ヶ崎驛へ出られる。行程三里半。

猿　橋

猿橋驛から東北十二丁、汽車が猿橋驛に近づく途中、桂川を渡る時右方に近く見ゆる。日本三奇橋の一で、長さ十三間、橋上から水際まで十七間、橋下一柱の支ふるものなく斷崖に架し奇構眼を驚かすものがある。

富士登山と裾野巡り

大月驛から富士吉田まで電車賃六十九錢、自動賃一圓。此方面は富士の裏裾野で、登山口として駿河方面よりも風光美があるし、五合目迄は森林帶で、樂な登山が出來るから、昔の富士行者は大抵此方面から登つたものである。

富士五湖巡りも比處を起點とするが都合がよい。籠坂峠の街道に入つて山中湖を見て引返し、河口、西、精進、本栖の四湖を經て、駿河の大宮町へ出るか、或は精進に一泊して本栖を見、

引返して、精進から甲府へ出るか又は鰍澤へ出て、富士川下りをして身延詣てをするも興がある。別途山中湖を後廻しとして、精進から同じ道を引返し、同湖を見て東海道線御殿場驛へ出るのである。富士吉田から御殿場へ、自動車賃二圓四十錢。及河口、西二湖を經て精進湖へ自動車賃二圓五十錢。湖上を舟で渡る別路もあり、此方が趣があるが、三人五人の小人數では舟の出ぬことがあるから、豫め心得ておく必要がある。其他は殆んど徒歩又は乘馬による外はない。さて五湖巡りに於て、精進湖の背後の烏帽子嶽（坂路二十三丁、標高千二百米突）へ登るのを忘れてはならない。これは精進パノラマとてその雄大なる眺望美は言語に絶する壯觀であり、五湖巡りの眞價は實に此處に發揮されるのである。

昭和二年三月十五日印刷
昭和二年三月十九日發行

定價金貳拾錢

鐵道省

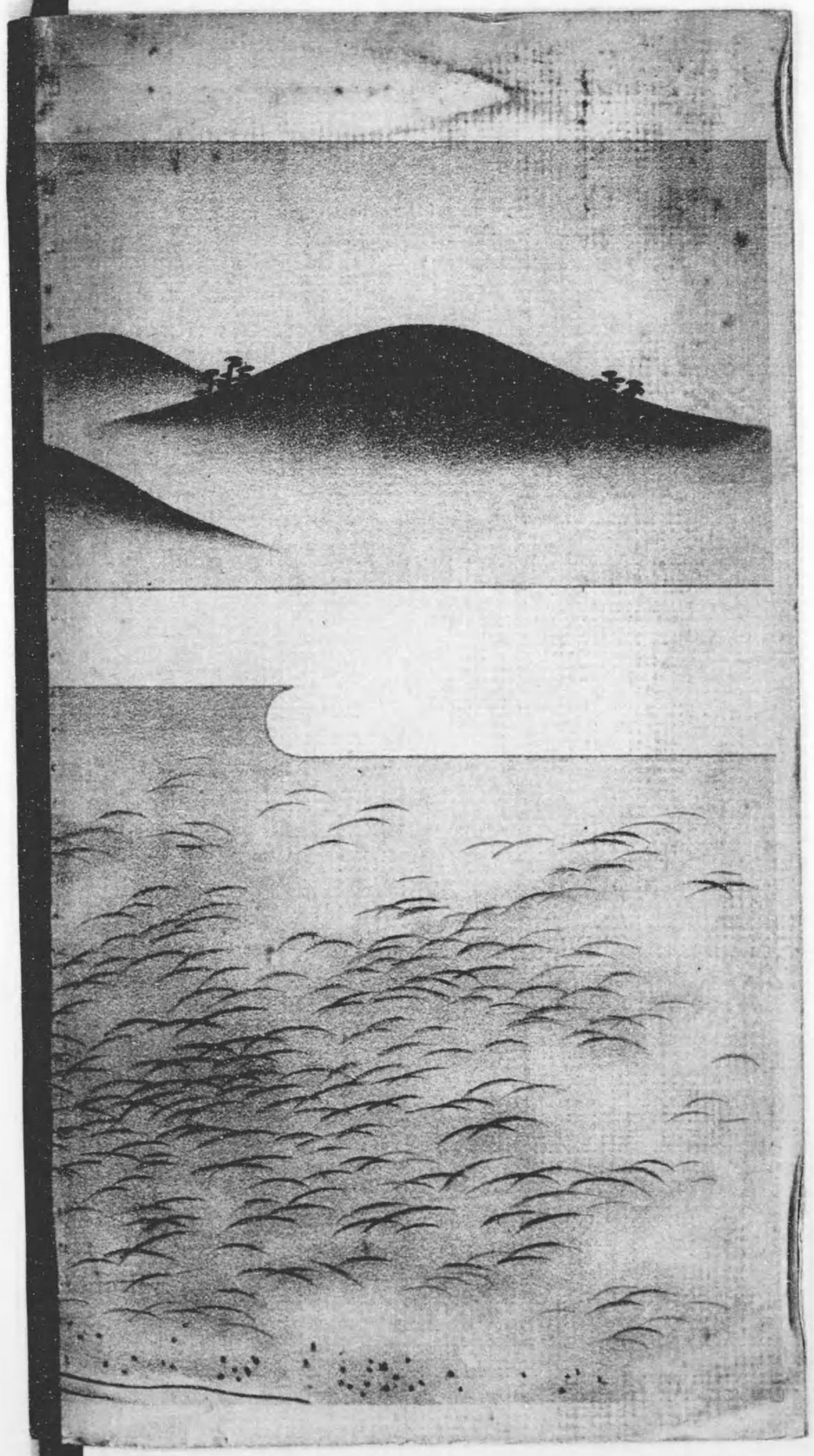
東京市神田區鍛冶町神田驛前
日本旅行協會
右代表者 芳賀宗太郎
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
發行者

杉山退助
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍
印刷者

印刷所

東京市神田區鍛冶町神田驛前
日本旅行協會
電話神田四二〇二番
振替口座東京六〇六三六
發賣所

不許複製



終